



匠林

SAKABAYASHI

隨筆特集

至高の陶醉



金刀比羅宮蔵 寛政6年(1794年)円山応挙 晩年の作(部分)

220年の伝統の技が贅をつくした「煌」きらめき

讃岐の金毘羅酒として親しまれてきた金陵が、酒づくりの贅をつつておくりだした「煌酒」だ。金陵の歴史は、今をさかのぼると二二〇年の寛政元年、当六代目であった西野嘉右衛門が、金星羅さんの薦ではじめた酒づくりがその第一歩。以来、金刀比羅宮のご神酒として栄誉をうけ、その丹精こめた手づくりの味は、金毘羅詣の人々からも広く親しまれてきた。煌酒「煌」のえも言われぬ風味とついでには、金陵の心意気と酒づくりの矜持が細やかにうつっています。

真珠玉のべとく搗きあげ

水晶のべとく研ぎすました酒造好適米(山田錦)

清酒「煌」に使っているのは、酒造好適米の中から選りぬかれた最高の大粒米。これを丹念に高度精白し酒の雑味等の原因となる外層部を削り、磨き、吸水のよい、粟粒よりやや大きい、玄米のわずから割はりの、まるで真珠玉のようなだけの酒米とする。これを、良質の寒の水でくり返くり返し研ぎすまし、本格的な酒づくりの仕込みへと移っていく。昔から「麴二配三造り」といわれいるとおり複雑多岐にわたる工程を熟達杜氏がつ

つこなしていく。杜氏は寒中夜も眠らず、我が子を育てるように精魂をこめ、技の限りをくつて低温でじっくりつくりあげる。こうして、清酒のアルコール分、旨味を米けから造り出した、手づくりの微妙精緻な煌を誕生させたのです。

芳醇なこく、口あたりの爽やかさ、喉ごしのよさ、まさに清酒の芸術品、この稀なる清酒煌を、日本酒をこなく愛するみなさまにじっくりと味わいつくしていただきたい。

煌
金陵

超特撰

税込
標準価格 10,185円 1.8L
5,093円 720ml

ラベル右下に記しております番号は、一本一本責任をもって製造いたしました品質の証し。ご入手いただいた貴方さまだけの番号です。

西野金陵株式会社 香川県仲多度郡琴平町四六三 電話(〇八七)七三三 四三三
未成年者の飲酒は法律で禁じられています。妊娠中や授乳期の飲酒は気をつけましょう。

涸林

SAKABAYASHI

隨筆特集



第84号

酒林

SAKABAYASHI

随筆特集



ベースボールカード

杖造り

善哉とお酒——海賊と山賊 続編

ほろ酔い詩歌紀行——田村隆一の酒

夏休み二題

ミシガンだより

日焼け黒ン坊はカゼをひかない——日焼け予防とビタミンD——

絵と文 〓 たまあじさい

詩人の凄さ、見事さ——右近 稜と麻生直子のこと——

池井 優 …… 4

高橋 和 島 …… 6

安森 敏 隆 …… 8

日高 昭 二 …… 10

内野 潤 子 …… 12

宮地 智 子 …… 14

杉本 忠 夫 …… 16

中西 美 子 …… 18

志村 有 弘 …… 19



この思想は難かしい 志村 栄守 …… 21

絵と文 写真 佐川 毅彦 …… 23

恨むなら地球温暖化 桐原 良光 …… 24

床屋ですか美容院ですか 片岡 義男 …… 26

矛盾考 山西 靖彦 …… 28

絵と文 米ちのくの祭「鹿踊り」 さかもと ふさ …… 30

はぐれ鳥 永岡 慶之助 …… 31

ごえん玉 山本 千明 …… 33

地産地消を思う 宮本 富夫 …… 35

小説風・江戸神仏歳時記(25) — 浅草・鷺神社 おとりさま 郡 順史 …… 37

表紙・グラビア……丸亀うちわ

ベースボールカード



池井 優

(慶應義塾大学名誉教授)

珍品の発見

アメリカオハイオ州の民家の屋根裏部屋から一〇〇年以上前のベースボールカードが見つかった。民家の住人だった親類の女性が亡くなり、権利を引き継いだ親族約二十人とともにキースナーさん（五十一歳）が民家を掃除していると薄汚れた箱が目についた。かつてそこで肉屋を営んでいたおじいさんがお客さんに配る目的で集めたベースボールカードが詰まっていた。しかも、保存状態が大変いい。その数約七〇〇枚、発見当時はさして価値

のあるものと思わず、その内の八枚をオークション会社の専門家に鑑定してもらったところ、「これはすごい、屋根裏からモナリザがでてきた」といわれた。最も価値の高いと思われる三十七枚が競売にかけられ、落札予想価格は五十万ドル（約三千九百五十万円）という。なんと七百倍すべてで三百万ドル（二億三千七百万円）相当の大珍品であることが判明した。ホーナス・ワグナー、タイ・カップ、サイ・ヤングといったマニアがのどから手が出るほど欲しい往年の名選手のカード

がぞくぞくと出てきたのだ。

そもそもベースボールカードは、アメリカで一八八〇年代タバコのおまけについてきたものだった。販売促進グッズとするとともに包装を強化し、紙巻きタバコが折れるのを防ぐ目的もあった。選手個人、あるいはチーム全員が表面に、裏面は生年月日、出身地、経歴、過去の成績などの情報が記されている。最初は大人が対象であったが、第一次大戦後、ガムやキャンデーの付録となり、ベースボールカード集めは子供たちの楽しみとなっていた。

やがて、付録でなく、ベースボールカードそのものの種類が増え、印刷の技術も発達し、コレクションの対象となるようになっていった。そうなる、かつて出されたカードの見直しがおこなわれるようになる。たとえば、タバコの付録につけられたホーナス・ワグナーのカードだ。ワグナー自身タバコを吸わず、「自分がタバコの宣伝に使われるのはごめんだ」とタバコ会社と交渉し、カードを回収させた。回収に

洩れたわずかの「ワグナー・カード」は、希少価値から保存状態のいいものは一枚で数万ドルの高値がつく。

何故ベースボールカードか

ベースボールカードのコレクションは、切手、コインと並んでアメリカ人にとって三大コレクションの対象といわれる。

だが、ベースボールカードのコレクターは「われわれは切手、コイン集めの連中とは全く違う」と胸を張る。ベースボールカードには「人生そのものがある」というのだ。たとえば、ペープ・ルース、ルー・ゲーリッグが活躍していた一九二〇年代後半から三〇年代にかけてゲーリッグが二千百三十試合連続出場を記録している間、ベンチにいた補欠の一塁手のカード、六球団を転々と渡り歩き最後に花を咲かせた選手のまったく無名時代のルーキーカード、マリナーズがフランチャイズとしてシアトルに定着する前、短期間シアトルを本拠地としたパイロッツという

忘れられた存在のチーム全員のカード……。こうしたカードはアレックス・ロドリゲス、デレック・ジッター、イチローといった大スターのみならず無名選手や不人気チームを対象にカードから選手の運命や球団の栄枯盛衰を回顧することもできるのだ。

なかには、エラーカードに興味をもつて集めているヘンなマニアもある。までもでないカードに関心をもつてコレクションの対象としているひとつとである。例えばカードを作成するため、シーズン前に業者が選手の写真撮影をおこなう。その際、ある選手は半分冗談で遊びにきていた弟に自分のユニフォームを着せ、帽子をかぶらせ撮影に応じた。担当者は気がつかないままそれがカードとなって世に出たのだ。また某選手のカードは印刷されてからユニフォームのズボンのチャックがしまっていないことが発見された。ある強打者のバットをもつての写真、なんとバットのグリップエンドに「放送禁止用語」がマジックで書かれてい

た。当然気がついて回収し、正しいカードに替えるのだが、エラーそのものに価値があるというのだ。

当然こうしたコレクターのために、毎年「ベースボールカード・ブック」が発行され、その年の各カードの値段、特に珍しい「レア・カード」の情報が載っている。またカードショウも各地で開催される。カード業者が会場に集まり、ベースボールカードの売買をおこない、交換に応じる。マニアたちはメモを片手に「日本人最初の大リーグ・マッシー村上のサンフランシスコ・ジャイアンツの二年目のカードはないかな」「一九七三年のニューヨーク・メッツ、選手のカードは揃ったが、ベラ監督のだけないんだ。今日、絶対見付けるぞ」と会場を歩きまわる。

ちなみに、日本のベースボールカードで、一番高価なのは、福岡にあった一九七三年の太平洋クラブの基満男と東田正義のツーショット、国内で十枚ほどしか存在せず二十万円はするとい

杖造り

同じ町内の水道工事屋Yさんは五年ほど前から、仕事が特別忙しいときは別として毎朝、奥さんと連れ立って近くの里山を歩いている。

このYさんに誘われ、わたしも今春から里山歩きを始めた。

標高二百メートル未満の雑木山（市有地）を六キロ、万歩計で約九千歩、ほぼ二時間歩くのが日課である。

比較的雨の多かった六月でも、合計二十一日、山へ出掛けたから、悪天候でなければ、ほぼ毎日歩いていることになる。

常連の山歩き仲間が約十人。当方は新入りなので、この十人はみな先輩に



高橋和島

（作家・郷土史家）

あたる。

高齢者が多いせいか、里山歩きであるにもかかわらず、彼らは例外なく、御嶽山詣での一行が手にするような背丈ほどの長さの杖を持っている。それも、古参組になると、ニス塗りの見栄えのいい夏ハゼの木の杖だ。これはKさんという杖つくり名人が、いっぱしの「山仲間」と認めたとき、プレゼントしてくれるもので、駆け出し三下奴のわたしはまだ手にできずにいる。

最初のうちは杖なぞ、たかが里山用、どんな棒切れでもいいと思っていたが、ほどなくこれは間違いで、山歩きにとって欠かせない友であり、帽子

や靴同様に自己主張やおしゃれのポイントになる大事なものだ、と気付くに至った。

そこでネズの木で、先輩たちのような山伏・行者の杖型ではなく、グリップのあるステッキ型の杖を作ってみた。自分ではまずまずの仕上がりになったと思い、使い始めると、隣人の大工さんが「素人なりにもう少しましな造りようがあるんじゃないかね」と喰い飛ばし、「一時間ほどおれに貸しな」と言って、電動木工機で木皮を剥ぎ取り、磨きをかけ、バーナーを使って焦げ目をつけるなど手を加えてくれた。

本職の後押しを得て、どこへ出して

も恥ずかしくないものができたのだから、杖はこれ以外必要ないわけだが、毎日山を歩いていると、下草刈りの際などに伐採され、放置されたままになっている杖向きの恰好の良い、夏ハゼ、ネジノ木、山ツツジ、アラカシなどが目につくようになり、見過ごせなくなる。

二本目は山ツツジで造り、三本目は夏ハゼを用いたものとなった。

という次第でいつの間にか手製ステッキは増えに増え、今では十一本を数えるまでになった。

連中はみな名前を持っている。「座頭市」「ブル」「ハナマガリ」「三つ目」「二本爪」「番長」「龍神」等々。

グリップや先端部の形を見ていい加減につけただけの呼び名なので、命名理由は省くが、どれもみな愛着を覚えるようになっているので、月曜は座頭市、火曜は二本爪という具合に日替わりで、十一本全員をわけへだてなく山へつれて行くことにしている。



善哉とお酒 — 海賊と山賊 続編



思えば、「海賊」と「山賊」、「善哉」

と「お酒」、このアンビバレンスが私たちの絶妙の関係を織りなしてくれたのかもしれない。下関の梅光女学院大学から、十年ばかりして私も同志社女子大学に赴任して来ると、杉野 徹先生はすでに同志社大学の方から先生は女子大学の方に移っておられ英文学科で活躍しておられた。

ある時、祇園の小料理屋で会合が終わった後、飲み物なら何でも注文していいと言うことになり、杉野先生は一人「善哉（ぜんざい）」を注文された。すると、さすが祇園の女将「あんたはん、なんと一番オツなもの注文しやるわ」と言つて、即座にアズキを取り寄せて「善哉」をつくつて出されたも

のである。それから、飲み屋に御一緒するたびに「善哉の杉野先生」と呼ぶことにしている。

先生との同志社女子大学での昨年の一年間は、なんとという僥倖に恵まれたことかと思う。田辺校舎から英語英文学科も日本語日本文学科も、今出川校舎に動くことになり、楽真館の五階の比叡山と大文字のよく見える隣同士の研究室になった。思えば、蜜月のような一年間であつた。先生の研究室には、いつも卒業生や外部の訪問者や学生でいっぱいであつた。その中の一人の、「隈本栄子」さん、という卒業生の方を紹介していただいたことも忘れ難い。氏は英文学科の出身であるが、学生時代には、六十年間今も続いている

安 森 敏 隆
(同志社女子大学教授・歌人)

「シェークスピア・プロダクション」の原語劇で主役を演じ活躍されたことは仄聞していた。氏は歌誌「塔」に所属する歌人で、『なんでもない日』（青磁社・二〇〇九年五月九日）という一冊の歌集が最近出されたばかりである。「二〇〇五年三月末、京都大学を定年退職。三十八年間の職業生活を終えました。二人の子（娘と息子）は結婚し、娘には二人の孫ができました。好きな歌舞伎、京舞の舞台を楽しみ、長唄の稽古をはじめ、友人達との旅行と、ささやかな幸せを楽しんでいます」と「あとがき」にある。その中に、杉野先生からも聞いていたことだが、こんな歌があつた。

送り火の次の日に来た事実なり
ふいに現れ受け入れるだけ

『なんでもない日』

噴き上がる不安の声に耳かせば
泣くしか他にないではないか

(同)

おかあちゃんと

幼子になり呼んでみる

七回忌終えて同じ病に

(同)

ある日、思いもかけず自分の身が病に冒されていることを知ることになるのである。「二〇〇七年の八月、母と同じ病、肺がんに罹っていることが、しかも進行した厳しいステージであることがわかりました。生きるにも病むにも体力、気力がいる日々となりました」(あとがき)とある。今、まさに告げられた「いのち」の現実を受容しようとし、不安の声に泣き、幼子になって母に呼びかける。自己の命の現実に向かうぎりぎりの声がヴィヴィッドに、ここから聞こえてくる。ここには、

「うた」の根源である「いのちのこゑ」が、しっかりといたいこめられている。私は早速、月刊誌「NHK 短歌」の「いのちを見つめる」で取り上げさせていただいたことであるが、杉野先生がいかに多くの学生のみならず卒業生の方々にも厚く信頼され、支えとなっておられるか、感じ入ったことである。また、先生には、「SEITO 百人一首」の英語の選者もしていただき、私の母校である「三次高校」にも、わざわざ「英語短歌」の実作指導にも行っていただき、まことに感謝している。

今年の三月の終わり、先生が引越したさる最後の日、竹村先生や寺川先生と、研究室の本などの荷造りや包装のお手伝いをしたことがある。ここでも、先生はいつものように、包装や梱包や掃除を自分でなされ、私は「セロテープ」をひとつ、ひとつ切って先生の手に渡しながらか、お話をすることぐらしいしかなかった。ところが、四月になって学校に行ってみると、大いに喜ばれて先生がとても大切に愛

用されていたお茶のセットや、足を温める温風機などを「安森先生へ」と書かれて、私の研究室の前に置いていつてくださったのである。私が、中国山地の山国の三次出身で寒がりであることと、お茶の好きなこともよく知っておられたのである。

山賊の私は「酒」を好み海賊の先生は「善哉」を好み、おおいに楽しみながら研究を続けて今日までこられたのも、杉野先生のおかげである。これからはば広く多くの方々の支えとなってお働きになられることであろう。また、「善哉」と「酒」でたびたび話したいものである。先生が瀬戸内の生口島の実家の幼稚園園長として立てるとき、「杉野徹(すぎのとおる)」先生の名前を入れた「折り句」を送ったことである。

過ぎ越しの遙か遠くに見ゆるもの
優しき瀬戸の生口の島ぞ 敏隆
(すぎのとおる)はるかとおくにもゆるもの／やさしきせとの／いくちのし
まぞ)

ほろ酔い詩歌紀行

田村隆一の酒

日 高 昭 二

(神奈川大学教授)

現代詩を代表する田村隆一には、歌人斎藤茂吉をとらえた印象深い一篇がある。

茂吉のDeiseの神様は

浅草の観音さまと鰻の蒲焼

かれには定型という

城壁があったから

雷門へ行きさえすればよかった

ぼくの神経質な神は

いつも不機嫌だ 火災保険もかけてない

小さな家と

大きな沈黙

一九七一年三月の雑誌『文芸春秋』

に掲載された「詩神」である。田村は、その四年前に東京を離れて鎌倉の材木座というところへ移住し、小さな借家に住んでいた。

そうした移住が、あらためて「定型詩人」としての茂吉への親炙と羨望を、いささか揶揄さえ感じさせる「詩神」への思いとして示されたものであろう。むろん、そういう自分は「定型」ならぬ「自由詩形」の詩人として「神経質な神」とたえず向き合い、「火災保険もかけていない」という不安定さと格闘しているというわけで、逆にここには、ある種の矜持がにじんでもいるだろう。その矜持を精神の深いところで支えているのが、「詩神」ならぬ「酒神」との親和性であることはいうまでもない。

田村隆一は、一九二三年、東京府北

豊島郡巣鴨村字平松というところに生まれている。当時そこは東京の郊外であるというより田舎町だといったほうがただしと回想している。荷風の『日和下駄』にもみえることだが、音無川が小石川の方に流れていくさびしい一角に『鈴木良』という料理屋が一軒あって、その料亭には地元の人々から気ちがい扱いをされた主人がいて、それが田村の祖父重太郎だったという。この「徳川の直参の孫」が、「半生の放蕩だけを資本に、料理屋という堅気でない商売をはじめたのである」(『若い荒地』)ともふりかえられていた。そうした祖父をもつ田村にはまた、みずからの故郷である巣鴨村で唯一の偉人といえるのは「三浦樽明」という大酒飲みであったと記したユニークな一篇がある。ナボレオンの故郷も、スタンダールの故郷も田舎であった―そういう言葉で始まる詩「わが故郷の偉人とその業績」(『歷程』一九八〇年九月)がそれである。冒頭の言葉につづけて田村は、田舎でないと偉人は出ないといっ

たのは新潟小千谷の詩人西脇順三郎であつたと紹介したあとで、では多くの田舎の偉人は誰かと問うてこの詩を書いている。その詩の後半部を次に引いてみよう。

三浦樽明

江戸後期の六位殿で

六位は殿上人ではないから

地下である 夜明けまえに大塚を

出て

地下は裸足で土の上をベタベタ歩

きながら

坂をのぼり坂をのぼり

駒込村の追分で地酒をくみ

本郷台の森川町で地酒をあおり

鎌安までは江戸の内

の本郷三丁目にたどりつき

それから

湯島の森まで灘の酒を飲みに行く

のだ

江戸一番の大酒飲み

これが六位殿の大偉業で

あとはなんにもない

「鎌安」＝兼安は、江戸本郷三丁目にあった歯磨粉や歯痛の薬を商っていた店で、「本郷も兼安までは江戸の内」といわれていたことでも知られる。「大塚」「駒込」「本郷」「湯島」など江戸の地名をちりばめながら、故郷の偉人を寿ぐという、この諸語に満ちた一篇をまえにして読者は、たとえ「あとはなんにもない」と断られたとしても、では酒のほかは何が必要かと、田村の言葉の尻馬にのつてうそぶきたくもなるだろう。

田村の「酒神」は、戦後の風俗を彩るカストリから、アブサンへ、そしてウイスキーへと、その種類も、そして酒場の風景も少しずつ変貌していく。その時々、詩人の魂の渴望が語られていく。

カストリを飲んだりシケモクを吸いながら
男たちは

親愛なるXにあてて

手紙を書いたのだ

無名にして共同なるものをめざして

（そして 誰もいなくなつた）

田村隆一にはまた、イギリスの作家コリン・ウィルソンの『わが酒の讃歌』の翻訳がある。それによれば、人間は過去一万年のあいだに大きく生物学的に変化した、その最も著しい変化は、頭のいいチンパンジー同然の生物から、ロダンの「考える人」への変化で、その変化が起こつたのは人間がアルコールの発酵法を発見した約B・C八千年以後のことであるという。それにつづけて田村は、「太陽とブドウの不定型の結晶」が、「時」によって熟成して行くように、詩もまた忍耐づよく、言葉の熟成を待つよりほかはないと記している。

この詩人にあつては、どうやら詩神は、どこまで行つても酒神とともにある以外にはないようなのである。

夏休み二題



内野潤子

(歌人・エッセイスト)

子供の頃の夏は、いつも涼しくて楽しかった。夏休みには毎朝近くの小学校の校庭で、ラジオ体操があり、友達のフミちゃんとミツちゃんが迎えに来てくれる。

フミちゃんの家は農家で、朝が早いから、私達姉妹より早起きなのだ。妹と私は祖母に起こされて、半分寝惚けの状態で服を着がえ四人で体操に行った。

体操から帰ると、縁側で朝の食事を妹と食べる。外の人はまだ眠っていた。糠漬けの茄子ときゅうり、大根の味

噌汁に大根おろしなどが並んでいる。色よく漬かった、茄子は大好きだった。祖母が「きゅうりも食べなさい」と言う。

それから小学生の二人の宿題の時間となる。妹と私は、同じ小学校で池袋にあった豊島師範の附属に通っていた。二つ違いの妹は、おっとりとしていて、私の後ろからいつも黙ってついてくる。通信簿はいつも私より甲が多くて、勉強がよくできた。

午後は友達が家の庭に集まってくる。それは私の家の庭には、太い大きな桜の木が一本立っていて、葉桜の影

が庭一ぱいに広がり、大変涼しい場処になっていたからで、テル子ちゃんもフミちゃんと妹のミツちゃんも「あそびましょ」と裏木戸から入ってくるのだった。そこで花いちもんめや、ことしの牡丹や、学校ごっこをした。

学校ごっこは、年長の私がいとも先生になって、みんなの通信簿をつけて渡すのが気分よかった。夕ぐれ陽がかげってから、表の舗装路に蠟石で円を書いて、石を投げる面とりもした。

遊ぶ時には、一度も気を抜くことがなく、さよならをして別れて、井戸で足を洗う頃は隣の石山さんの邸から、蠅の声が聞こえてきた。

家族で丸いお膳を囲み夕食がすめば、緑色の蚊屋の中に入ることりと眠ってしまった。

明け方、祖母が硝子戸を少し明けてくれると涼しい風が入ってきて、又ひと眠りする。

そして又フミちゃんとミツちゃんがかかる。

フミちゃんの家は、その頃まだ茅葺

き屋根の家だった。広い地所の後ろの庭は薔薇園になっていて、フミちゃんの父は園芸の仕事をしていた。広い前庭には、ダリアの花が一面に咲いていて、母がお金を渡して「これでフミちゃんの家でダリア買ってきて」と頼まれることもあった。私は喜んでとんで行くと、フミちゃんの小柄な母親が「おまけしてあげようね」とダリアを切ってくれた。

フミちゃんの家は土間があつて、片隅には竈が置いてある。フミちゃんの母親は、私が行くと、麦茶にお砂糖を入れて飲ませてくれた。茅葺きの家はいつも仄暗く、上がったことはなかったが、奥の部屋はなんとなく怖かった。今、この原稿を書いている机の上に、温度計がある。室温二十八度、湿度四十六%となっていて、硝子戸の外は、かんかん照りだ。

そしてフミちゃんもこの世にいないし、薔薇園もフミちゃんの家も今全部マンションになってしまった。

次は三人の子供たちの夏休みが楽し

かった。私の両親が、十六人の孫たちのために、一夏千葉の上総興津に漁師さんの家を一軒借りてくれることになっていった。

夏休みが近くなると、母がたくさんの寝具を揃えて、前もって鉄道小荷物チッキで送っておいてくれた。兄妹の家族が、二家族、三家族重なっても十分に足りる布団であった。

その外、カルビス、ビスケット、のりの缶なども送ってあつて、その細かい心遣いを今思うと本当に有難かったと気が付く。

私は三人の子供をつれて、子供の友人なども一人位はさそつて、一週間から十日間ぐらい海辺でくらしした。夫は送つてきて夏休みは自分の研究のために一人で帰り、私は開放された海の暮らしをたのしむことができた。

朝は七時ごろ起きて食事の支度をす

る。
賄いは自分たちで三食作つたので、のんびりと賄の小母さんをしてすごした。近くの畑からとれた野菜や玉露茶

を籠に入れて売りに来るのを買った。魚屋ではとれたての新鮮な魚を買う事もできた。肉やも注文とりに廻ってくる。海の近くに一軒のラーメン屋があり、そこでお昼をすますこともあったが、いつもは焼きむすびを焼いて、子供たちの居るバラソルの下に運んだ。

麦茶を入れた大きなやかんを下げて、地元の人と同じに日に焼けて海辺に通った。通りすがりのよろず屋で、牛肉大和煮の缶詰を一こ買つて、一切れずつ分けると子供たちはとても喜んだ。人の親になった三人の子供たちも、この海辺の夏休みは忘れられないと言

う。
故郷のように懐かしいと話し合っている。

亡き祖父のおかげで、たつぷりとおいしい海辺の夏休みを持つことができたのである。

父も母も海辺の家に来た事はなく、暑い東京で働いていたのだった。

ミシガンだより



宮地 智子

(詩人)

「人はいつでも、誰かに呼ばれているのではないか。」こんな一行で結ばれる詩がある。その詩の一行のように、私もまた、小さな者に呼ばれてアメリカに渡る。ミシガン州・イーストラン

シングに住む娘一家のもとに、春になると呼ばれて行くのが私の年中行事になって三年目の今年は、日本で東日本大震災があったちょうど一周年目に当たっていた。

緯度の高いミシガンでは、もっと北

の方から、カナダ雁が渡って来ても、まだまだ冬の寒さがぶり返して零下になることもあって、行く度に酷い風邪をひいて寝込むことになる。

昨年から今年にかけては異常気象だそうで去年のクリスマスには珍らしく雪が降らなかつたそうだ。雪景色が背景にあればこそ、サンタさんがトナカイに引かせた橇に乗ってやって来ようものを、昨年は何と盛り上がり欠けたクリスマスであつたことだろう。

けれど、現実問題として、積雪はさまざまな事故を引き起こすので、日本なら雪国では冬になるとスノータイヤに換えるのが普通であるのに、ここミシガンではタイヤを換えたりしないそうだ。実際、娘の話によると、高速道路でスリップをして、危険な目に遭つても、もともとここで生活している人達に、同情のまなざしはなく、あれ、慣れない人が困ってるよ。」と笑って見ているようだ。

一方で、同じ町内会では、隣人同士助け合うことは一般的に行われている。それも、なかなか合理的だ。例えば、春になると、どの家でもいつせいに庭の芝生の手入れを始めるものだが、芝刈機を持っていく家の主人が芝刈機のない家に、「いくらいくらでやるけどどう？」などと声をかけたりする。勿論、専門業者より割安の値段である。

このような合理性を、私は好ましく思う。日本人的感覚ならこうはいかないだろう。それが無償の行為なら、むしろ相手に心の負担を与えて貸し借り

の感情が生まれ、結局のところ、ヘタほど高いものはない」という諺どおりになりがちだ。

さて、オーベアという制度は、アメリカの家庭に住み込みで、家事や育児の手伝いをしながら英語を学ぶ若者のためにある。

夫婦ともどもフルタイムで働く、子供のいる家庭にとって大変な制度である。この春、新しくやって来たオーベアさんは、沖縄出身の二十一才の元氣凜冽な女性である。彼女は保育専門学校を卒業したばかりで、沖縄にある米軍基地内の保育園で働くために英語を修得したいという目的を持っている。

本土では、(彼女は沖縄以外の日本人を、本土の人と呼んでいる。)蛇皮線とも云われる三線サンセンを持参して来ていて、下の孫の四才の誕生日にはハッピーバースデーのうたを、その三線で弾いてくれた。弓も撥も使わず、小さな爪を使って爪弾くその音色の何という媚なめやかさ。暖かさ。アメリカに來たからこそ出会えた、沖縄の文化のすば

らしさは何より、若くして既に仕事に対する責任感を充分に身につけた、この一人の女性M子さんによって、私の心にしみ渡ったのである。それは、本土の若者にはもはやめったに見られないだろう、何か真摯な心を持つ尊い人格、といったらいいだろうか。

この家では、早朝に両親が出勤した後、M子さんが親代りになって、世話をし、朝食を済ませ、孫達は車で幼稚園に送り届けられる。慣れるまでの一か月程は、私が一緒に居るのでもいいが、その後のことを考え、彼女は食事の仕度など、常に私に寄り添っては時に写真やメモを取りながら学んでいる。それは二人にとって楽しいひとときでもあった。ホワイトソースの作り方を私がやってみせると、翌日は彼女が沖縄料理の麴チャンプルーをご馳走してくれる。みごとに焼き上がったローストビーフを生姜やりんごを磨り下ろした特製ソースで試食した次の日は、ソーメンチャンプルーを……といった風に。昼食後、小一時間もすると、夕飯

の下準備が待っている。幼稚園から連れ帰った後も、時として宿題を見てやらねばならない。

五才の孫の通う公立幼稚園では、小学校入学に備えた教育がしっかりと行われている。例えば辞書の引き方を教えるのに、絵本のように、絵入りの大きな文字の特別な冊子を生徒に持たせていて、幼児の頃から辞書を引く習慣を養うということが丁寧に実践されているし、あるいは、生徒が極く薄い小さな読本を家に持ち帰り、それを生徒自身が声に出して読むのを家族の人に聴いてもらって、サインをもらう。そして、そのサインの数が十人に達したら、先生がご褒美に、小さなぬいぐるみや、縄とびの縄を下さる。M子さんミコも私も、子供に物を与えすぎるのではないかと心配だ。けれど、こんなプレゼント好きの国民性が、先生への感謝の気持ちを伝える時には大いに拍手を送りたくなる。感謝デーの日には、生徒の保護者たちの寄附金によって、すべての先生にプレゼントが送られる。

日焼け黒ン坊はカゼをひかない

— 日焼け予防とビタミンD —



杉本 忠 夫

(虎の門病院 内分泌代謝科
非常勤嘱託医)

昔から、古老の言い伝えがいろいろとあります。たとえば「急げば廻れ」、「腹八分目」等々医療現場でもなるほどと頷ける名言です。

ところで、直射日光によるメラノーマ(黒色腫)や皮膚癌の発症を恐れて、この数年夏になるとアラビヤのビジャーブやブブカを着けた女性かと思えるぐらい頭から足の先まで覆い隠し、サンシェード付きの帽子、サングラスなど万全の日よけ予防に徹した女性を見かけることが多くなりました。

先の古老のお話を借りてきましよう。昔、古老は真つ黒に日焼けした元氣な子供を見かけると「黒ン坊」(よ

く日焼けした子供)は寒い冬になってもカゼをひかない丈夫な子供だといへみながら褒めておりました。

ところで、過度の日焼けは皮膚を傷め、将来メラノーマや皮膚癌を発症しやすくなると世界保健機構(WHO)、米国の皮膚科学会などが警告しております。皮膚癌を防ぐ対策として、日照りの強い時間帯でのサンシェードを推奨し帽子、長袖のシャツ、手袋等を用することを勧めております。また、日焼け止めクリーム(サンスクリーン)の使用も勧めております。

ところで、それまでは燦々と降り注ぐ日光の下で永年暮らしてきた元氣な

古老は首をかしげて極端な日よけ予防対策には納得できないようです。

そこで、日よけ予防と健康についての別の観点での医学的検討が必要となっておりました。

タイミング良く、二〇一二年二月に日よけ予防が健康へ及ぼす一つの問題点についての研究論文が発表されました。

この研究論文について少し見てみましょう。

その前に、団塊の世代以前の方々が小中学生の時代に日光に当たらないと背中が円くなる『くる病』になると保健の授業で教えられました。それは、日光が皮膚に当たると皮膚を刺激し体内でビタミンDの合成が促進されます。反対に日光が不足するとビタミンDの合成が低下しノートルダム寺院のせむし男カジモドのように背中が曲がってしまうと教えられました。

戦後間もない食料不足の時代に、小中学生にビタミン不足を補うため、ビタミンAとビタミンDを多く含有する